

近世以前の服飾素材研究を基にした現代ファッション素材への提案  
Garment Materials Proposal based on Survey of Costume Colors  
before Japanese Modern History

柚本 玲\*1+, 成田 千恵\*2+, 和田 早苗\*3+, 雨宮 敏子\*4+  
Lei Yumoto \*1+, Chie Narita \*2+, Sanae Wada \*3+, Toshiko Amemiya \*4+

\*1 文化学園大学服装学部, 東京都渋谷区代々木 3-22-1

Faculty of Fashion Science, Bunka Gakuen University

\*2 日本女子大学, 家政学部被服学科

Japan Women's University, Faculty of Human sciences and design

\*3 江戸川大学, 社会学部経営社会学科, 非常勤講師

Edogawa University College of Sociology Department of Business Management

\*4 お茶の水女子大学大学院, 人間文化創成科学研究科

Ochanomizu University, Graduate Courses of Humanities and Sciences (Doctoral Program)

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: The aim of this study is to propose the color combination proper to fit the contemporary use of colors, based on the survey of costume colors in the early Japanese Modern History. In order to pursue this idea, the present authors examined the sense of seasons which inherited from ancient period in "KASANE-IROME". "KASANE-IROME" means the arrangement of colors of the costumes which associated with flowers or plants of seasons since the Heian Period. The descriptions about "KASANE-IROME" in the records of "UTA-AWASE", a poetical composition match, and in the literature written in the Heian period has been examined. The relationship between seasons and costume colors in "SHOZOKU-SHO", books concerning costumes, has been analyzed. On the other hand, the authors made several woven and knitted fabric samples using wool yarns of the two or three colors, selected in the present investigation of "KASANE-IROME". In the work of next year, the more woven and knitted fabrics and some dyed fabrics will be produced as the samples for the study. These samples will be supplied for the research of questionnaire, and it will be clarified that the color combination in the samples induces the feeling of seasons on the subjects of the questionnaire. Finally the authors intend to suggest that the senses of seasons arisen from not only the colors but also the color names are applicable to the contemporary garments.

はじめに

---

\*1) yumoto@bunka.ac.jp

日本では古来より季節を示す色名が多く使われてきた。また服色としてそれを取り入れることにより、季節感あふれる豊かな衣文化を醸成してきた。しかしながら現在、温暖化した気候、冷暖房の普及等により、暦と実感が一致しないことも事実である。とはいえ、四季を持つ日本において、生活に季節感が溶け込む豊かな文化を継承していくことは、我々の衣生活、ファッションにより大きな広がりをもたらすはずであると考えた。

物質的に充足されている現在、ファッションのコンセプトは一通り出尽くされたように感じられる。しかし、だからこそ今、季節を衣服に取り込むという古代からの洗練された衣生活文化の概念をあらためて見直すことに意義があると考えます。

本研究では、古代より我が国で服飾文化に深く取り入れられてきた季節感を見直し、現代の服飾素材に応用する方法を模索していく。

また、色目およびそれに対する人々の感情の調査結果をもとに、現代の素材を用いて、色そのものだけでなく色名(言葉)からも季節感を感じられる素材を提案することを目的とする。

研究成果は報告書や学会発表等で広く公表、さらに素材サンプルは研究メンバーが教育現場で活用することとする。これらにより、本研究の成果を、広く社会にフィードバックすることを目指す。

## 1 かさね色目に関する文献調査

### 1.1 目的

平安時代より行われた衣服の配色の工夫「かさね色目」には「桜」「卯花」「紅葉」といった四季折々の自然の景物や草花などを示すものが多い。ここでいうかさね色目は、袷仕立の衣の裏と表の配色の組み合わせを指す場合と、衣を何枚か重ねた際の配色の組み合わせを指す場合があり、衣の色も染色による色、あるいは経緯糸による織色では異なる表情を見せる。

本研究では、かさね色目に注目し、重ね色目を応用した服飾素材を表現するために、文献上に表れたかさねの名称および解釈を検討し、時代ごとの色の組み合わせを整理することを目的とする。

### 1.2 方法

平安時代の文献資料の中で、かさね色目の初期的な記述が見られる資料として歌合がある。歌合とは、左右に分けた和歌を合わせて優劣を比較し、勝負を判定する文学的遊戯である。そこで、歌合の記録に見られるかさねの名称を挙げ、文学作品を対象としてその色目がどのように装われ、人々の色彩感情に関わっていたのかを検討する。また、そのような服飾と季節感との結びつきを、平安時代以降の装束書の記述から時代を追って追究する。

### 1.3 本年度の活動

平安時代の歌合の場における服飾の色について、『平安朝歌合大成』(復刊)<sup>1)</sup>を用いて「十卷本歌合」、「廿卷本類聚歌合」の記録より抽出した。例えば、延喜 13 (913) 年 3 月に開催された「亭子院歌合」の記録に「男・女、左は赤色に桜襲、右は青色に柳襲」、長久元 (1040) 年 5 月に開催された「斎宮良子内親王貝合」には、「左は撫子重ねに棟の裳唐衣、右は菖蒲重ねにおなじ唐衣どもにて」とある。このように歌合には季節感と結びついた装いの記述がみられる。このようなかさねの名称と思われる色目について、同時代に書かれた『宇津保物語』、『落窪物語』、『源氏物語』などの物語や『枕草子』の記述において、どのように描かれていたのかを検討している。

また、時代を経てかさね色目の具体的な色の組み合わせがどのように解釈されているのか、『雅亮装束抄』(平安時代末)、『雁衣抄』(鎌倉時代末)などの装束書の記述から考察を進めている。

## 2 季節をあらわす色目の現代素材への応用

### 2.1 目的

各時代で解釈された平安時代のかさね色目に対して、現代の人々(被験者)がどのような季節感を抱くのかを調査することを目的とする。そのために様々な解釈のかさね色目を現代の素材へ応用する手法を検討する。その応用手法として、以下の3つの方法を考えた。1) 2色をたて糸とよこ糸に配置し織る。または2色をあわせて編む。2) 基布に異なる色の薄布を重ねる。3) 重ね衿、パイピングのように2色を並べる。今期は1)を実施したのでその報告を行う。

### 2.2 方法

先に挙げた歌合に見られるかさね色目のうち、まず桜がさねに注目した。桜は人々にとってその色と季節の認識が一致しやすいと判断したためである。

現代の解釈の一例として、日本の色 植物染料のはなし(吉岡 常雄)<sup>2)</sup>より桜がさねを例示した(表 1)。図 1に桜がさねを示す。色は文献3における色彩索引のRGB値を用いて示した。

表 1のように桜がさねは白と紫、白と二藍(ふたあい)、白と赤の組み合わせである。これらに近い色の市販の毛糸を組み合わせ、試料を作成した。また、かさね色に使用される色を再現するため、染色を試みた。

表 1 現代のかさねの解釈<sup>2)</sup>

季節	かさね	表	裏
春	桜がさね	白 白 白	紫 二藍 赤

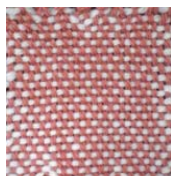


「赤」は「赤花(紅花)」と考え、「紅」を示した<sup>3)</sup>。

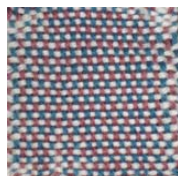
図 1 桜がさね:表白、裏紫または二藍または赤<sup>2)</sup>

### 2.3 本年度の活動

図 2に市販の毛糸を用いて、2色ないし3色を組み合わせで作成した試料を示す。それぞれに示した



たて:長春色、よこ:胡粉



たて:蘇芳と花田



たて:紫、よこ:胡粉



紫と胡粉の2本取り

図 2 桜がさねを毛糸で表現した試料

毛糸の色名は文献3と毛糸を目視で確認して判断した。

桜がさねを表現する試料として、よこ糸を白(胡粉)として平織を実施した。その際、たて糸は長春色(ちようしゅんいろ)あるいは紫を用いた。また、二藍(ふたあい)を表現するため花田(縹)と蘇芳を交互にたて

糸にした場合の試料も作成した。さらに、紫と白を二本取りで編地を作成した。次年度にはこれらの試料をもとにアンケートを実施し、試料の種類を増やしていく。

表 2 試料の毛糸<sup>3)</sup>

No.	色	R	G	B	Col.	Lot	品名	社名
1	長春色	191	103	102	900	820	クイーンアニー	(株)ダイドーインターナショナル
2	蘇芳	142	53	74	978	820	クイーンアニー	(株)ダイドーインターナショナル
3	花田・縹	0	98	132	826	310	クイーンアニー	(株)ダイドーインターナショナル
4	紫	89	44	99	49	C	プリミエ中細	日本毛織(株)
5	胡粉	255	255	251	1	B	プリミエ中細	日本毛織(株)

年月日 \_\_\_\_\_  
時間 \_\_\_\_\_  
被験者ID \_\_\_\_\_

上記の色の組み合わせを見て以下の質問にお答え下さい。

(1) 春夏秋冬のどの印象を受けますか?  
春 夏 秋 冬

(2) あなたは次の項目について、どのように感じますか?目盛上に○を付けて下さい。

どちらでもない

明るい				暗い
若々しい				年配な
派手な				地味な
鮮やかな				くすんだ
冷たい				暖かい
嫌い				好き
着たくない				着たい
・				・
・				・

ご協力ありがとうございました。

年月日 \_\_\_\_\_  
時間 \_\_\_\_\_  
被験者ID \_\_\_\_\_

季節ごとに思いつく花と、その色をご記入下さい。

春 5月 6月 7月 夏

冬 1月 12月 11月 秋

ご協力ありがとうございました。

図 3 次年度に実施するアンケート例

### 今後の計画

かさね色目に関する文献調査については、引き続き文献資料の検討・考察を進める。

季節をあらわす花として認知されやすい花と色についてアンケート調査を実施する。

かさね色目を表現する試料、多種の色の染布を被験者に提示し、それから連想される花、季節をアンケートにより調査する。

古代より我が国で服飾文化に深く取り入れられてきた季節感を現代の服飾素材に応用する方法を提案する。

### 引用文献

- 1) 萩谷朴編著;『平安朝歌合大成』(復刊); 第 1-10 巻; 同朋舎出版、(1979)
- 2) 吉岡 常雄著; 日本の色 植物染料のはなし; 紫紅社 (1983)
- 3) 濱田 信義 編; 日本の伝統色; パイ インターナショナル (2011)